

## The influence that the IADL enforcement situation before illness gives in ADL at admission

○御書正宏 (OT)<sup>1,2)</sup>, 小西マナ (OT)<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>医療法人社団生和会 周南リハビリテーション病院リハビリテーション部, <sup>2)</sup>医療法人たかし会 尾鍋外科病院リハビリテーション部

Key words: IADL, ADL, FIM, (FAI)

## 【はじめに】

近年のリハビリテーションでは活動と参加に対するアプローチに重点が置かれており,日常生活動作(以下ADL)だけでなく入院時から手段的日常生活動作(以下IADL)も考慮したアプローチが一層重要視されてきている.先行研究では入院前のIADLとADL能力は関連性があるとされているが,入院時ADLと入院前のIADLの関係性を報告した例は少ない.今回入院前のIADL実施状況が入院時のADLとどのような相関性があるか検討した.また,入院患者における病前のIADL実施状況を領域ごとに調査し入院前のIADLの重要性について検討した.

## 【対象と方法】

20XX年X月から3か月間に入院した患者30名(男性23名,女性7名)を対象とした.対象者の平均年齢76歳±11歳,そのうち脳血管疾患8名,運動器疾患16名,呼吸器疾患6名,であった.調査方法は入院時のFunctional Independence Measure(以下FIM)の総合,運動,認知項目,入院前のFrenchay Activities Index(以下FAI)を家族または本人へ聴取した.分析方法は総合FIM,運動FIM,認知FIMとFAIそれぞれの相関を検討した.統計解析ソフトはJSTATを使用しSpearmanの順位相関係数を用いて検討した.また領域ごとに屋内家事,屋外家事,戸外活動,趣味,仕事の5つに分け,入院前のIADLの遂行状況を調査した.なお本研究は臨床研究に関する倫理指針(厚生労働省告示),日本作業療法士協会 倫理綱領等に準じて実施している.

## 【結果】

入院前FAIと入院時総合FIMに正の相関( $r=0.5$   $p<0.07$ ),入院前FAIと入院時運動FIMに正の相関( $r=0.4$   $p<0.02$ ),入院前FAIと入院時認知FIMにも正の相関( $r=0.5$   $p<0.04$ )があった.入院前のIADLの各領域で,週1回以上している(3点),時々している(2点),まれにしている(1点)の総数が15人以上であった項目が「食事の片づけ」,「洗濯」,「買い物」,「外出」,「屋外歩行」であり,その他は「していない」人数が半数以上であった.

## 【考察と課題】

今回の調査ではFIM合計,運動,認知項目とIADLにおける相関性があるとの結果となった.先行研究では,入院前の日常生活時の身体活動が入院中の認知機能低下に予防的に作用するとの報告もあり,今回の結果からも一定のIADL遂行状況が入院時のADLに影響を及ぼすことが予想された.各項目では屋内家事や外出,屋外歩行等の戸外活動を行っている対象者が多かった.外出など戸外活動や屋外家事が多かった要因として対象者は広島市内在住者が多く,比較的公共交通機関等で外出しやすい環境だったことや定期的な通院が必要な対象者が多かったことが考えられる.また対象者は男女比に差がみられたが,屋内家事は全体として行っている対象者が多かった.これは男性でも独居生活によって家事を遂行する状況も多く,屋内家事は生活していく上で重要度が高いことが考えられる.今回の調査対象者は平均FAI得点13点と標準値より低く,年齢の分布にもばらつきがあった.また入院時の機能的重症度や同居家族の有無等は考慮されていない.今後の課題として個人のライフスタイルや疾患を考慮した調査が必要と考える.今回の結果から入院時から対象者のADL場面だけでなく,入院時から病前のIADL状況を把握することは退院後の生活予後を判断していく上で重要であると考えられる.